

2 章

変容的教育にふたたび火をともし

— 参与的事例研究 —

Rekindling the Fire of Transformative Education: A Participatory Case Study

ヘルゲ・M・オスターホールド
(ゴールデンゲイト大学)

エリザベス・フッサール・ルビアーノ
(カリフォルニア統合学研究所)

デイヴィッド・ニコル
(カリフォルニア統合学研究所)

監訳 中川 吉晴
(立命館大学)

訳 齋藤 由香
(立命館大学大学院先端学術研究科博士後期課程)

「ジャーナル・オブ・トランスフォーメティブ・エデュケーション」の編者序のなかで、ウィル・マクホイニー (McWhinney, 2005) が述べているように、変容的教育 (transformative education) の発展は、あたかも沸騰した水の表面に泡が浮かびあがってくるのを眺めているようなものである。水の温度が上がるにつれ、沸騰した水のなかから小さな気泡がぶつぷつと浮かびあがってくる。その泡の内部では、もともと水であったものが蒸気へと変容するという、魔術的とさえ言えるような現象が起こっている。そしてマクホイニーは、沸騰した水がその外部環境によって冷やされてゆくのと同様に、変容的教育の多くのプログラムは「冷たい」因習的な教育環境に取り囲まれ、その結果、はじめに意図されていた変容的な潜在力が弱められてしまってい

るのではないかと述べている。

本論文は、変容的教育にふたたび火をともしことを目的としている。私たちが望むのは、ティーポットのなかで現われては消えていくような、泡のような教育に貢献することではなく、むしろポットの「うち」にある、甘く、養分の高い蜜のような教育に貢献することである。本論文で述べていくような、内から外へと向かうことを強調する教育様式は、変容的学習 (transformative learning) の他のアプローチを鼓舞するうえでも必要不可欠なものである。そのようにすることで、こうした参与的教育 (participatory education) がいつまでも教育機関の周辺に追いやられているのではなく、いずれは一つの規準となって、みずからにふさわしい場所を見いだすことになるであろう。

本論文は、サンフランシスコのカリフォルニア統合学研究所 (CIIS) において、東西心理学部のプログラムの一つとして、2005年春学期に開講された「身体をとおしたスピリチュアルな探究」(Embodied Spiritual Inquiry) という大学院コースの事例研究である。この事例研究は、変容的学習に対する統合的かつ参与的な取り組みの一例として示されるものであるが、これは統合教育 (integral education) の将来に向けて潜在的な重要性をもつものである。本考察では、まず最初に当コースの概要を紹介する。つまり、中心となっている目的、基本構成、探究の焦点、探究のツール、典型的なクラス構成、そしてコースの展開を支える理論的枠組みなどを紹介する。つぎに、コースをつうじて参加者にあらわれた、主要な学びの成果を要約して示す。最後に、こうした探究成果の妥当性を左右する文脈的性質について述べ、当コースの主要な成果をまとめる。それとともに、変容的教育の将来に対する参与的アプローチの潜在的な重要性について、簡潔な議論をおこなうことにする。

身体をとおしたスピリチュアルな探究——コースの概要

背景とコースの目的

「身体をとおしたスピリチュアルな探究」は、CIISの教員であるホルヘ・

N・フェレールによって実施され、博士課程の学生デイヴィッド・ニコルがこれを補助した。クラスの参加者は、CIISのさまざまなプログラムに在籍する修士あるいは博士課程の学生12名で、その内訳は男性4人、女性8人であった¹⁾。コース・シラバスのなかで、フェレール (Ferrer, 2005) は、このコースについて「参与的かつ協同的な研究という文脈のなかで、身体をととしたスピリチュアルな探究を、プラクティスをとおして試みる」(p.1) と述べている。このコースは以下の二つの作業仮説にもとづいている。すなわち、知 (knowing) の営みから身体性を排除した結果、ある特定のスピリチュアルな見方やジレンマや体系が生みだされてきたのではないかという点と、だからこそ、より身体化されたスピリチュアルな探究は、スピリチュアリティの議論のなかで長く問題となっていることに新たな光を投げかけるのではないかという点である (Ferrer, 2006を参照)。コースの第一の目的は、協同的に形成された問いに対して個人的および集団的に探究をおこなうことであり、そのさい、統合的な知 (integral ways of knowing) をもたらすような方法を用いることである。すなわち、ここでのいう統合的な知とは、人間のすべての次元をふくみ、それらが同様に探究の過程に貢献するような知のあり方であり、この人間の諸次元には、身体、生命世界 (vital world)、ハート、マインド、そして意識がふくまれる (Ferrer, Romero, & Albareda, 2005)。そして第二の目的は、トランスパーソナル研究あるいはスピリチュアリティ研究のなかで、参与的かつ協同的な研究方法を打ち立てることである。

方法論

コースでは、ジョン・ヘロンとピーター・リアソンのいう「協同的探究」(cooperative inquiry) に触発された教育学的方法が採用された (Heron, 1996: Heron & Reason, 2001)。このアプローチは以下の3つの点に特徴がある。(a) すべての参加者が等しく協同研究者となること。つまり、参加者

1) カリフォルニア統合学研究所 (California Institute of Integral Studies) の詳細については www.ciis.edu を参照。

全員が参与的方法についての、研究上の諸決定に完全に関与するということ。(b) つぎつぎに生起する経験とふりかえりの連続的なサイクルを、ともに歩み抜いてゆくこと。(c) 認識を単なる概念的な知（ヘロンの言葉で言うなら「命題的」なもの）にとどまらせるのではなく、それをさらに「体験的」「表現的」、そして「実践的」な知にまで拡大してゆくこと。ヘロン（Heron, 1996）は、完全な協同的探究と、部分的な協同的探究とを区別している。前者は、グループの一人ひとりが協同研究者であり、かつ協同主体となっているような場合であり（たとえば、研究のすべての段階において皆が等しく同じだけの決定権をもつことなど）、これに対し後者では、グループの一人ひとは協同研究者であるのだが、同時にファシリテーターが協同主体として部分的に参加している。どちらの場合においても、イニシエーターやファシリテーターは「方法論的ノウハウやファシリテーションによる導き」といった点において概して大きな役割を果たすのだが、しかし協同的探究はこうした役割の差異が取り払われてゆく方向に動いていくものである。

以下に述べるように、本事例研究における探究は、より伝統的な質的参与の方法から（そのなかでは主たる研究者が研究上の諸決定に際して全権を有していたり、重要な役割を果たす）、より完全な協同的探究へと徐々に移行していく。とくに探究が第二段階に入ったときに、そのようになる。たしかにこの探究は外的に開始され（たとえば、コースの骨子はフェレル自身の手によるものである）、ファシリテーターによって導入された探究ツールを介してなされたのであるが、探究がすすむにつれて、ファシリテーターはますます活動に巻き込まれるようになり、それだけでなく、参加者もコースの後半では、学習方法や研究の諸決定に対してもっと大きな責任をとることを決意するようになった。このような展開は、ファシリテーターがホリスティックな変容的学習のラディカルな手法——あとで述べるような「相互的身体瞑想」のようなもの——を導入しているときには、重要であるようにみえる。このような手法では、参加者がそれになじむようになるまで、かなりの程度、指示的なファシリテーションが必要とされる。本事例研究における探究方法と、ヘロンとリアソンのいう協同的研究とのあいだの、もうひとつの重要な

違いとして、ヘロン（Heron, 1996）では5回から8回の試行が推薦されているのに対し、本コースの構成上では2回の体験的試行が認められているだけであった。

コースの基本構成

グループは毎週水曜の夜に3時間、12週間にわたって集まった。コースは以下の4つの主要部分から構成されている。

（1）「身体化されたスピリチュアリティ」と「身体をとおしたスピリチュアルな探究」という二つの概念についての簡潔な紹介、および理論モデルの紹介。この理論モデルは、講義と事前に読んでおくべき文献をとおして提示され、コースの構成を規定するものである。（授業1回分）

（2）地域のヨーガセンターで、「相互的身体瞑想」（Interactive Embodied Meditation）の導入的リトリートを週末の2日間おこなう。相互的身体的瞑想とは、身体、生命力、ハート、マインド、そして意識の各センターの認識力へふれるためにつくられた瞑想法である。

（3）探究のプロセスを2サイクルにわたっておこなう。それぞれのサイクルは、さらに4つのセッションに分かれている。最初のサイクルでは、集団的に形成された問いに対して探究をおこない、つぎのサイクルでは、最初のサイクルのなかで立ち現われてきた個人的な問いを探究することになる。各サイクルにおける4つのセッションでは、探究のプロセスをすすめるなかで、人間の諸次元（身体、生命力、ハート、マインド/意識）にそれぞれかかわっていく。

（4）各サイクルの最後には統合のためのセッションがおかれ、参加者が経験の全体をふりかえり、各セッションの体験的探究から得られた知識をとりだし統合させてゆくための足がかりとする。コース終了時の最終の統合セッションでは、12週間の探究プロセスを締めくくるための儀式（リチュアル）がおこなわれる。

探究の焦点

2日間の導入的リトリートの終了後、クラスにおける協議の結果、メンバーたちは「関係のスピリチュアリティ (relational spirituality) の本質は何か」という問いを、協同研究の、少なくとも一番目のサイクルにおける探究の焦点とすることに決めた。この問いは意図的に厳密には定義しないでおき、意識的な出会いのときに生じる自己と他者、および「あいだ」という神秘的な空間の経験をめぐって、幅広い探索がおこなわれた²⁾。

最初のサイクル終了時におこなわれた統合のセッションのなかで、クラスのメンバーがふたたび協議した結果、2回目のサイクルは、最初の探究サイクルの過程で個々人に身体のなかからわきあがってきた問いの探究にあてることに決定した。こうした個人に属する問いを探究したにもかかわらず、それは関係のスピリチュアリティの本質の探究という大きなテーマと関連があるものであった。

探究のツール

クラスで使用された基本的な探究ツールは以下の3つである。

- (1) 相互的身体瞑想 (Interactive Embodied Meditation: IEM)
- (2) 統合的ワークと創造的表現——ドローイング、描画、身体のムーブメント、日記、詩作、その他の創造的な表現。
- (3) 言語化への取り組み、経験についての批評的討議——二人組、小グループ、グループ内での報告、車座になったのシェアリングなど。

2) 「あいだの領域」に関する協同的探究に関連した報告としては、ヘロンとラフッド (Heron & Lahood, 近刊) を参照のこと。また「あいだの領域」の概念化としては、フェレール (Ferrer, 2002) の説明を参照のこと。そこでは、スピリチュアルな現象を「多くの場所で生起する参与的出来事」(multilocal participatory events) として説明している。多くの場所とは、個人や関係性や共同体など、さまざまな場所をふくむ。また、ヘロン (Heron, 1998, 2006) の、関係のスピリチュアリティ、ならびに、あいだの現実としての状況的スピリットの発現に関する考察を参照のこと。「あいだの領域」という表現は、最初マルティン・ブーバー (Buber, 1970) によって使用されたものである。

IEM（相互的身体瞑想）は、二人のスペイン人心理学者、マリナ・ロメロとラモン・アルバレダの研究から生まれたプラクティスである（Ferrer, 2003；Ferrer, Albareda, & Romero, 2004；Romero & Albareda, 2001）。このプラクティスは、そのかたちにおいて非常に単純なものであるが、入念に開発された手法であり、開かれた空間をつくりだし、人間のさまざまな次元に独特なかたちで埋め込まれている潜在的な洞察や知恵の声に「深く聴き入る」ことができるようにするものである。ほとんどの場合、このプラクティスには、互いに敬意を払いながら二人組でおこなう観想的な身体接触がふくまれている。一般的には、一人が受動的な役割（身体接触を受けとる側）を受けもち、もう一方が能動的な役割（身体接触をほどこす側）をはたす。どこに接触するかは、どのセンターを探究しようとするかによって変わってくる。すなわち、「マインド」と「意識」のセンターの探究であれば、接触の場所は頭と額の部分であり、「ハート」であれば胸と背中、「生命世界」であれば下腹部あるいは「ハラ」、そして、「身体」（ボディ）であれば足と脚の部分である。生命センターへ焦点をあてたIEMを例にとってみると、受け手となる人が背中を下にして寝そべり、与え手はパートナー（受け手側）にIEMの開始を伝えたのち、受け手の腹の上に両手（あるいは額）を押し当てながら、開かれた瞑想的な身体接触をつづけてゆく。

このプラクティスは、二人のあいだの接触をふくむものであるが、どちら側もその役割にかかわらず、自分自身の経験に集中することが求められている。こうした内側への集中は、目隠しとしてバンダナを使用することによって、より効果的に促進される。バンダナの使用は高く推奨されているが、決して強制ではない。プラクティスのあいだは穏やかな音楽が流される。音楽は現在注意を向けているセンターを呼び覚まし、それと共鳴するようなものが選ばれる。たとえば、ボディ・センターには単調でゆっくりとしたドラムのビート音、ハートにはより洗練された、感情に訴えかけるような音楽などである。プラクティスについての説明とデモンストレーションをしたのち、ファシリテーターは口頭でプラクティスを導きながら、参加者にいつどこに身体接触を加えればよいのか、穏やかに自覚させる。また、プラクティスを

とおして生じてきた体験内容について、それがどのようなものであれ、オープンになって無条件に受け容れるように励ましてゆく。

そしてまた、ファシリテーターは、瞑想がもっとも深まったときに、参加者たちに、探究の焦点を思い起こさせる。たとえば、最初の探究サイクルのなかで、参加者たちがある特定の次元の声に「聴き入る」ことに深く集中しているとき、ファシリテーターは「関係的スピリチュアリティの本質は何か」と問いかけることもある。参加者たちは、ある特定のセンターがこの問いに答えるものに「聴き入る」なかで、参加者それぞれにわき起こるイメージや感情、考え、音、その他いかなる感覚をも、あるがままに受け入れ、それらに注意を払うように促される。それと同時に、こうした答えをただちに知的に理解しなければならないという気持ちを手放すようにも導かれる。このようにして、参加者たちはみずからの身体、本能、ハート、魂が本来備えている声と知恵にふれる方法を学び、これらの側面が、探究中の問いに対して答えてくれるものを明らかにしてゆくのである。

アルバレダとロメロにとって、IEMのプラクティスにおいて焦点をあてられる各身体部位は、人間のさまざまな深層世界への入口となるものなのである（Ferrer, 2003）。彼らによれば、人間のあいだでの身体接触、とりわけ生命力、ハート、マインド、ボディ、そして意識といった各センター間の接触は、ホリスティックな教育のなかでとりわけ重要でもあるが、それはこうした直接的な相互接触が、伝統的な教育体制のなかで麻痺させられ、押し殺され、無視されている部分を、深いところから目覚めさせてくれるからである（Ferrer et al., 2005）。

一般的なクラス構成

それぞれのサイクル終了時におこなわれる統合のセッションをのぞいては、クラスは毎回、つぎのような手順で開始された。（１）「オープニング・ウォーク」。自由に歩き回る。これには、各自がクラスの物理的スペースの感覚をつかむこと、からだを動かし伸ばして現在にとどまるようにし、変化を受け入れやすい状態にすること、そして／あるいは、それぞれの異なるセ

ンターが現在どのようなエネルギー状態にあるのかをファシリテーターのガイダンスに従いながら探ることなどがふくまれる。この活動を少しおこなったのち、クラスはつぎの手順にすすむ。(2)「導入的ゲーム」。この部分は、ふつうティーチング・アシスタントによっておこなわれる。このゲームは、そのセッションにおいて探究される特定のセンターに、より多くの気づきをもたらすことを目的としている。ゲームのあと、参加者たちはふたたび、(1)の観想的なウォーキングにもどり、この瞬間に感じられているものを一番よく表現する単語あるいは非言語的な表現を探すように求められる。この段階であらわれてきたものは、つぎの(3)「シェアリングの輪」のなかで、強制ではなく、表現される。

「シェアリングの輪」が終わると、ファシリテーターは、つぎに(4)「IEMプラクティスのデモンストレーション」をおこなう。この段階でファシリテーターは、プラクティスの説明をおこなうだけでなく、いくつかのポイントを示して、探究のプロセスを深め、IEMが参加者全員にとって安全かつ敬意にみちた自発的な経験となるように導いてゆく。いくつかのポイントとは、以下のようなことである。

- プラクティスの実行にさいしての、いくつかのオプションの説明。たとえば、他の参加者との相互的なかわりをもたずに、自分だけでプラクティスをおこないたい場合の説明。
- もし参加者が現在おこなっているプラクティスを中断したければ、いつでも、何も言わないで中断できるということ。
- それぞれの参加者がみずからの内面へより深く集中してゆくことを目的とした、バンダナの任意の使用について。
- このプラクティスは、事前に設定しておいた目的を達成するためにおこなうのではなく、むしろいかなる体験内容であれ、それに開かれたままになって、プラクティスが展開していくのにまかせるということ。

またこの時に、参加者からの質問に答えたり、彼らの必要や要望におうじ

て、必要であればプラクティスを調整したりする。2回目の探究サイクルにおいては、この過程はより活発になってくる。というのも、クラスのメンバーがそれぞれ自分の声を見つけはじめ、彼らの経験を高めてゆくのに必要なIEMプラクティスの調整について、協同的な決定をおこなうためである。これはたとえば、一週間のプラクティスを最初から最後まで固定した二人組でおこなうほうが良いのか、あるいは、グループのすべてのメンバーと相互接触をおこなうほうが良いのか、といった決定である。今回のクラスでは全員が、すべてのメンバーとの相互接触が最善だと強く感じていた。

つぎに参加者たちは（5）「IEMのプラクティス」に入っていく。この過程は通常、クラスのなかでもっとも時間を要するところである。上記のように、IEMはファシリテーターによる口頭のガイドのもとになされる。ファシリテーターは、穏やかな口調で、各人の探究をそれぞれのセンターへ向けるように導いていく。たとえば、ボディ・センターに関して、ファシリテーターは「ボディはスピリットがそのまま現われたものでしょうか。それとも、スピリットが変容したものでしょうか。それとも、魂がすむ寺院でしょうか」などと問いかける。あるいは、それぞれのセンターがどのように関連しあっているかについて問いかけることもある。たとえば、「生命センターは……創造的なエネルギーへの入り口です。それはハートを養い、支え、開くことができます」と言ったりする。ガイダンスはまた、最初の探究すべき問いを、言葉をつうじて思い出させるためにも用いられる。すなわち、最初のサイクルでは「関係的スピリチュアリティの本質は何ですか」と問いかけられる。参加者たちは、イメージ、フェルトセンス、あるいは何であれ生起する体験内容に、できるかぎり開かれてるように促される。

プラクティスにつづけて、クラスは、つぎの（6）「統合のワーク」の段階に入る。これは、経験の非言語的な「処理」をおこなう段階である。これにあてられる時間は、イメージやシンボルをつうじた個人の表現チャンネルを見いだすうえで決定的に重要であり、この段階は、経験を概念や一般的な命題といった言語に置き換えようとするまえに置かれる。このような表現は、通常ドローイング（描画）、日記、詩作、あるいはボディ・ムーブメントを

とおして生じる。この時間のあとは休憩時間であり、この間に参加者は動いたり、リラックスしたりでき、その間に、クラスがより言語的な段階へとスムーズに移行していくことができる。

クラスが再開されると、参加者はプラクティスをともにこなったパートナーとふたたび集まり、(7)「小さなグループ・シェアリング」をおこなう。小さなグループとは二、三人を指すが、少ない人数構成にしておくと、親密な関係性のなかで、みずからの経験を言語化しやすくなる。こうしたなかで参加者たちは、主にイメージやドローイングを手がかりとしながら、みずからの経験をシェアするように励まされる。このようにすることで、経験そのものもつ十全な豊かさの発現を妨げ壊してしまうような、時期尚早な概念的分析や経験の収束を避けることができる。実際、経験の概念的な理解には数日、数週間、あるいは数ヶ月かかるとも言われており、それぞれの世界(センター)の探究の体験が本当に「沈殿」するまでは、そうした理解は起こらないのである。

つぎに、これらの小グループが集まって車座になり、(8)「より大きなグループ・シェアリング」をおこなう。そこでそれぞれの参加者は、プラクティスの経験のなかでもっとも重要だと感じたものや、プラクティスをおして得られた洞察のなかからもっとも意味があると思われるものを一つ選ぶように求められる。ここでもまた参加者たちは、経験を構成するさまざまな要素を概念的に理解したり識別したりするというプレッシャーを受けることなく、経験の貴重さをそのまま受け容れることが求められる。またクラスのメンバーが描いた絵を他のメンバーたちが静観し、他者の経験を自分の経験に統合したり、それによって自分の経験を補完したりするための時間をもつ。

それぞれの授業の最後には、何らかの(9)「終了」のための儀式的時間をもつ。たとえば、最後にグループ全体の身体接触をもって車座を終えたり(両隣の人と手をつないだり、片手を自分の胸にあて、もう一方の手を隣の人の背中にあてるなど)、グループのすべてのメンバーにアイコンタクトして、プロセスのシェアを互いに称えあったりする。毎週、私たちは、このともに創造しあうプラクティスが美しく花開き、それ自身で育っていくのを目

のあたりにしているかのような感じであった。

理論的背景

さきに記したように、フェレールはこのコースについて「参与的かつ協同的な研究という文脈のなかで、身体をととしたスピリチュアルな探究を、プラクティスをとおして試みる」と述べている。研究のなかの協同的要素は、以下に示すヘロンとリアソンのいう「協同的探究」のいくつかの特徴にしている（Heron, 1996；Heron & Reason, 1997）この探究モデルにおいてヘロンとリアソンは、認識論の枠組みを拡大し、「知る」ということを、体験、表現、命題、実践といった一連の次元に分けてとらえている。「体験的な知」（experiential knowing）は、世界と他者に対する直接的な体験をとおして得られる。それは探究の変容的な結果へと導くもので、すなわち、探究に参加する人の内的存在や行動に変化をもたらす。「表現的な知」（presentational knowledge）は体験的な知のなかから生じてくるもので、その体験と出合いの意味を、非言語的あるいは非概念的な方法（たとえば、美的あるいは行動的な仕方）で表現することによって生じる。「命題的な知」（propositional knowledge）はさらにすすんで、体験と表現を、観念や思想や言語的表現に定式化し、情報的価値をもつ成果や言明のかたちで経験を概念化する。最後に「実践的な知」（practical knowing）は、得られた知を特定の交流、行動、あるいはスキルへと適用することである。協同的探究の方法論上の独創点は、学習のこれら4つの次元が、探究と知の形成プロセスのなかに積極的、明示的、意図的に組み入れられている点である。

コースのなかでは、体験的な知の部分は、おもにIEMプラクティス、ゲームへの参加、瞑想的ウォーキング、その他の儀式的な活動をとおして得られた。表現的な知は、IEM後のドローイングや、創造的なムーブメント、創造的なライティング（ほとんどが詩作であった）をとおして得られ、その後これらの創造的表現のシェアリングをとおしても得られた。命題的な知は、体験に関して最初に生じた思考、洞察、観念を定式化するなかで取り入れられた。この知は、参加者が探究プロセスのなかで個人および集団に生じたテー

マをふりかえるときに、すなわち統合のセッションや、授業の最後に課せられたレポートのなかでとくに引き出された。最後に、実践的な知は、参加者一人ひとりの実践的ツールとして獲得され、自分自身の人生と教育プロセスに対する、より身体化され、共創的で、統合されたアプローチに役立てられた。

参与的リサーチについて仮説として置かれたのは、探究プロセスに人間のすべての次元を意図的に組み入れると、学問的な研究の成果と幅が著しく拡大する、という点である。フェレール等 (Ferrer et al., 2005) による論文「インテグラル・トランスフォーマティブ・エデュケーション——参与型への提案」のなかでは、統合（インテグラル）教育の未来を形づくるうえで、おそらくこの種の参与的学習と、認識論の拡大が影響力をもつようになってくると論じられている。今日支配的な統合教育の認知中心的モデルは、瞑想やムーブメントといったオルタナティヴなプラクティスを教育の枠組みに取り入れてはいるものの、依然としてマインド（精神）に探究の主導的立場を認めるものである。これに対して、参与的アプローチは、人間のすべての次元の認識力を活性化し、それらが協同して、よりホリスティックな知識の構築をはかれるようにする。通常のマインド中心のアプローチで探究をおこなう場合、その成果は知性的な理解や研究——たとえば、論理的分析、合理的論議、あるいは課題文献や学問的著作についての議論など——から得られる。フェレール等（2005）が指摘するように、学習活動が体験的な要素やプラクティスをふくんでいる場合においてすら、非知性的な次元は、教育プロセスの実質的要素としてはほとんど目を向けられていない。こうした統合教育は、フェレールの言葉を借りれば「プリコラーシュ」的アプローチと呼ばれ、人間の諸属性を取り込もうとはしているものの、やはりそこではマインドが学習のプロセスを支配している。

フェレール等（2005）によれば、統合教育のより真正なアプローチは、探究プロセスのなかに人間のすべての次元を意図的に統合していくことから生みだされる。つまり、探究のプロセスのなかで、すべてのセンターが共創造的 (cocreatively) に参与するということである。このアプローチにおいて、

ボディとハートはマインドに駆り立てられたり指示されたりするのではなく、むしろ自律的になり、より大きな全体のなかで相互に関連しあう要素となる。そして、それぞれの次元は、よりホリスティックに問いを探究していくために必要な、独自の性質と洞察を保持しているのである。言い換えれば、それぞれの次元が等しく扱われることによって、(体験的、表現的、命題的、実践的な知の様式をふくむ) 拡大された認識論における知識の形成は、大いに高められる。その場合、知識の形成は、たった一つの源(たとえば、マインド)から生じるのではなく、生と現実に参加するすべての認識的源から生じることになる。

フェレール等(2005)によると、参与的アプローチはマインドからその支配力を放棄させるものである。支配することから解放されたマインドは、他の人間的次元の能力が開化するのに合わせて、みずからも開いてゆくようになり、人間の経験や探究の問いに関して、よりホリスティックで、統合的で、多次元的な見方が生じることに貢献するようになる。こうして「二つのマインド(頭)は一つのマインドよりも、よりよく考える」という日常的な言い回しは、「多くの次元は一つの次元よりも、よく知っている」へと拡大されることになる。つまり、マインドは協同作業者となり、人間のほかの次元が「言わ」ねばならないことを伝える「認識の翻訳者」となり、伝達者の役割を果たすようになるのであり、唯一の特権的な知の保持者ではなくなるのである。

身体をとおしたスピリチュアルな探究——コースの成果

この探究プロセスでの諸発見を例示するために、私たちは、ヘロンの「拡大された認識論」(extended epistemology)で述べられている多様な形式の成果をふくめる。つまり、その形式では、主流の研究にみられる過度に狭い経験主義を「乗り越えている」4つの探究成果の領域が認められる。これによって、より包括的な参照枠が生まれるが、それはとりわけこの種の探究には適切なものである。たとえば、多くの参加者は、関係のスピリチュアリティとは何かという問いに対して、彼らの経験と身体化された洞察を、言葉を

つうじて統合し表現することに困難をおぼえていた。参加者の一人が述べているように、この体験的で多次元的な探究にふくまれるテーマは「簡単に言語に還元できない」ものであり、むしろ「言語は、こうした非言語的・身体的・感情的要素をもつ創造的な非言語表現を、そのなかにふくみ、またそれを支えるものでもある」。したがって、詩やドローイングのような、言語に「ふくまれ支えられた」、経験の創造的表現を私たちは成果にふくめている。

探究のテーマは、1回目のサイクルでは、より一般的な視点から見られ、2回目のサイクルでは、より個人的なトピックとして明確にされた。それにつれて、みずからの体験に対する参加者のフィードバックもより多彩になり、ある特定の問いに直接関係したものというよりは、むしろ大きなトピック全体のなかで、探究を織りなす糸のようなものになった。しかしながら、さまざまな姿かたちをとった成果を見渡してみれば、全体的な探究の焦点に何らかの仕方ではかわる一群の知識がそこにあることがわかる。こうした探究の特徴を際立たせるためにも、明らかになった成果を提示するにあたって、開かれた姿勢と関心をもってのぞみ、最終的な結論や、究極的な解答を示すことは試みないで置く。ここに示される成果は、探究プロセスの最中や、その後に参加者によってなされた記述、口述、創造的表現、ふりかえりをふくんでいる。プロセスのなかで生じた内的過程の他の創造的表現、たとえば、ダンスやムーブメントといったものは、ここではとりあげていない。これは、それらをイラストや言語で伝えることが本来できないためである。関係的スピリチュアリティというトピックをめぐる、クラスのなかで生じた深遠で、多次元的かつ身体化された知恵を論文という形式で捉えようとすることは、非常に難しい課題である。さらに付け加えるなら、本論文のなかでは、探究されたテーマにかかわる広大な題材を、根底的で、くり返しあらわれるいくつかの基本線にまで凝縮して示すことが必要である。ここにおいて著者たちは、それらの基本線が必ずしも成果のすべてを包含しきってはならず、多くの個人的な洞察が紙幅の都合上言及できないことを認めて置く。

参加者たちが探究過程の途中あるいはその後にはたえずフィードバックをしているように、探究プロセスは、彼らにとってこれまでにない新しい深遠な

意味経験になっていたと言える。身体と知のさまざまなレベルを総動員して自己、他者、そして「あいだ」を探究することは、場合によっては参加者の生き方を変えるほどに強力なものとなりうる。以下、私たちは、関係的スピリチュアリティの本質、あるいは「あいだ」についての探究をとおしてあらわれた、いくつかの意味深いテーマについて述べていく。まず最初に、関係的スピリチュアリティの本質について述べた命題的および表現的な成果についてみていく。これらは、参加者たちが共同の、身体化された探究の場に身を置くなかで浮かびあがってきた洞察や経験である。つぎに、探究過程全般について報告された参加者たちの経験内容から、変容的で実践的な成果について述べていく。このように探究成果を特徴的な二つのグループに分けて提示するのは、ヘロン（Heron, 1996）の考えを部分的に踏襲しているためである。ヘロンは、探究プロセスを観察するなかで、命題的・表現的成果は「個人から分離可能」（それらは外的媒体をとおしてシンボル化されてはじめて存在する）であるのに対して、変容的・実践的成果は「探究者から分離不可能」（それらは個人に内在する存在の質やスキルである）であるとみなしている（p.107）。

命題的・表現的成果

探究のコースの初期、参加者たちは、関係的スピリチュアリティの本質を探究するために2人組でIEMをおこないながら、そこで経験される「共有された場」に言及しはじめた。すなわち、身体的瞑想に取り組むなか、参加者たちのあいだでは、しばしば自己とパートナーとのあいだに「統一感」を感じさせるような、あるいは「境界線がやわらかくなり、ときには溶け去ってしまう」ような、非日常的経験が起こっているという一致した見解が広がっていくようにみえた。経験とふりかえりのサイクルをとおして、このような「あいだ」の本質（それとともに、関係的スピリチュアリティの本質）が大いなる神秘とパラドックスをふくんだものであるということが明らかになっていった。経験の質はちがってきたり、ゆれ動いたりしているようにみえた。つまり、参加者たちのあいだでも、さらには個人においても、自己と他者の

一体性という見方から、差異と分離の明確な気づきへと変化していったのである。以下で私たちは、しばしば「あいだ」と呼ばれるものの、三つの経験領域を区別して述べていく。つまり、「一体性」(oneness)、「コミュニケーション」(communion)、そして「非二元性」(non-duality)の三つである。

1. 一体性——多様なレベルにおいて溶け合うこと

多くの参加者が、身体的瞑想の最中にパートナーとのあいだで「エネルギーの混じり合い」や「一体性の感覚」の経験が起こったと報告しており、これはグループ全体においても、物理的レベルやエネルギー・レベルで同様に感じられたと述べている。多くの場合、参加者たちは、この一体性が物理的身体やエネルギー的身体を超えて、意識そのものにも溶け込んでゆくような経験をしたと報告している。そうした状態において、参加者は、身体的、エネルギー的、感情的なレベルの、通常のアイデンティティの区別や境界だけでなく、意識のアイデンティティすらもはや経験されないと述べている。たとえば、ある参加者はプラクティスのなかで、彼とそのパートナーが彼自身の、そして互いの（微細な）身体のなかに「入り込んで」いったとき、彼に「意識的可能性の広大な海が開かれていった」様子について述べている。「あいだ」に身を置くことの感情的な質は、一般に「深く親密である」、「穏やかである」、「喜びにあふれ、実り豊かである」などと表現されるもので、心身の拡大や、気づきの変容をうかがわせる。しかし、ときには参加者が過去の傷や失望と再びつながったり、分離や孤独の実存的経験にふれたりすると、恐怖や悲しみといった感情を呼び起こすこともある。

つぎにあげる表現的成果は、「あいだ」の経験を、境界のない統一として創造的に表現している。詩のほうは、エネルギーとアイデンティティの融合について語ったものであり、ドローイング（図1）のほうは、統一されたエーテル界に溶け込み、継ぎ目なく重なりあっている様子を描いている。

魚と愛する人と私はひとつ。

あいだはなく、空白もなく、ないということもない。

そこにあるのは、ほんやりかすんだエネルギーのかたまり。
熊と太陽の光、希望と自転車、私とあなた、それらを分ける境界はない。
私があなたにふれながら、私は私にふれている。
そして、私はすべてにふれながら、私たちにふれている。

(サラ・カー)



図1 (エリザベス・フッサール)

2. コミュニオン——ともにあるが離れていること

一体性の経験が何度も話されるのに対して、参加者のなかには「あいだ」の経験を、溶け合い、ひとつになることとしては経験しなかったということを強調する人たちもいた。「共有空間」には入ったという報告は多々あるものの、自己は依然として他者からはっきりと区別され分離されたものとして経験され、他者と融合したようには経験されなかったのである。ある女性は、関係的なスピリチュアル領域の質について、自分にとってその空間は、彼女の自己意識同様、何かと混ざり合うというよりはむしろ、より明確になるようだったと書いている。彼女は自分が感じたその空間を「間主観的で、癒しをもたらす」と述べ、「たんなる役割や要求をみだしあうことを超えた、有機的な作用と受容が起こった」と述べている。彼女はここで、その空間が共有されたものでありながらも、個人的なものであることをはっきりと述べている。別の参加者によるつぎの詩は、表現的レベルにおいて、同様の経験と洞察を示している。

私は私
あなたはあなた
それなのに、私たちは私たち
私たちは現実
私とあなたと同じように

(サラ・カー)

関係性

それはもはや単なる勝利者ではない。
モルフィング（形態化）、トランスフォーミング（変形）
モンタージュ、
あなたの破片と
私の破片が励ましあって、
ひとつの作品を創造している。
そのアートは、動き、流れ、踊りだす。

(キム・ベラ)

ハートのセンターに焦点をあてたプラクティスについて報告するなかで、ある参加者はこの「共有され分かたれている空間」で生じた興味深い感情経験について述べている。彼女によれば、パートナーとの深いつながりのなかで経験の中心に浮かびあがってきたのは、彼女が「自分のものだとは思わない」悲しみの感情であった。自分の額をパートナーの胸に押し当てたとき、もしかしたら彼女はパートナーの悲しみにふれたのかもしれない（後のフィードバック・セッションにおいて、彼女のパートナーはプラクティスの間中ずっと悲しみの感情を抱えていたと述べている）。さらにふりかえりを重ねるなかで、彼女は、認識的なマインドの干渉がない身体接触では「自分自身のハートの感情と同時に、互いのハートの感情、あるいは集合的なハートの感情を経験している」と考えるようになった。

また別の参加者は、体験をイメージ画で描いている。このドローイング(図

2) のなかで、ハートは生命の内在的存在に開かれることにより、同時にすべてによってふれられている。多くの手は、彼女と周囲のコミュニティとの接触を表している。しかし、彼女自身の女性の身体の輪郭線と、その周りのいくつかの身体の輪郭線ははっきりと描かれており、それぞれの人の存在が示されている。彼女（と他者）はコミュニティの一員であり、コミュニティによって暗にふれられ支えられているのだが、しかし同時に一人ひとは、それぞれ個別のかつユニークな、独自に開花してゆく人間の可能性をたずさえている。



図2（エリザベス・フッサール）

3. 非二元性——融合と個別化

さらに、融合と個別化が同時に存在していること、深く親密な経験と無限で自由な広がりを経験が同時に存在していることといった、逆説的な経験についての報告もみられる。これらの報告には、一見したところスペクトラムの両端にあるような経験が同時に並行して存在しており、身体的な気づきのなかで、意識が一方の極から反対の極へと引きつけられる様子が描かれている。ある参加者は、身体的瞑想のなかで生じたこの逆説性についての気づきを美しい表現で語っている。

いかなるもの、いかなる人のあいだにも、そこには本質的なちがいないものはありません。私たちはすべてひとつなのです。私と私でないも

のとのあいだには、それを分けるはっきりした線はありません。だけど何かがあるのです。他の誰ともちがう何かが私のなかにあります。私と私でないものは、逆説的ですが、不可分であり、また分けることもできます。この探究の奥底には、この緊張があるのです。

いくつかのケースにおいては、探究プロセスのコースをつうじて、この種の非二元的な理解へと向かう統合がみられた。これは参加者が体験的で概念的な全体性へと向かっていくときに起こった。そのときには、スペクトラムの両極が、互いに排除しあい矛盾しあうことなく可能であり、それらに到達でき、受け入れることもできる。以下の詩は、このような意味での統合にふれている。

さあ、来たわ！
骨とすべて、
受け止めて、受け止められるものたちよ。
わたしは喜びに向けて跳躍する
情熱の
力の
生命の
炎のなかで躍りあがる。
手をいっぱいに広げ
世界を抱きしめる。
愛が私の足をくすぐる。
光がマインドをひたす。
興奮が内なる核心から放射する。
私は肉のネクターに酔いしれる。
私に身体はない、
なぜなら、私の身体はつながりとめられていないのだから。
私は知ることがない、

なぜなら、私のマインドは空っぽで開いたままだから。

私は、知ることのない世界に耽る。

だが、私は知っている。

私自身を。

(キム・ベラ)

この非二元性の状態、参加者が一見逆説的な状態と接触するようになる状態は、さまざまなレベルにおいて経験される。ここで述べてきた個人間のレベルのほかに、そうした経験は個人内のレベルにおいても経験される。たとえば、足と脚に集中するプラクティスをふりかえりながら、参加者の何人かは、自分の身体の堅固さや密度をはっきりと感じるようになりながら、一方でエネルギーの諸センターのあいだで同時的な開放が起こり、浸透の体験をしたと述べている。つぎの画（図3）には、両極が統合されてゆく経験が描かれている。つまり、堅固で根づいていて、グラウンディングしながら、それと同時に開放的で、空間的で、浸透的でもあり、それらが一方から他方へと動いていく。



図3（エリザベス・フッサール）

変容的・実践的成果

関係のスピリチュアリティの本質を調べていくにつれて、参加者の個人的な問題や領域が浮かびあがってきた。探究の報告を見ると、彼らが個人的なテーマに関して深く新たな気づきを得ただけでなく、実践的かつ変容的なレベルにおいても変化したことがわかる。以下では個人内の変化についてもとりあげるが、ここでヘロン（Heron, 1996）の論点を強調しておくことは重要である。ヘロンは、個人の変容は「それぞれにおいて、個人的な出会いをとおして探究者たちとともにある」（p.105）とき、もっともよく促進されると述べている。以下にあげるのは、参加者たちによって報告された、そうした変化を示すいくつかのテーマである。

1. 身体化された知の統合

実践的かつ変容的なレベルのもっとも直接的な成果の一つは、IEMそのもののもつ統合的な影響力であった。多くの参加者たちが、身体——その全体とともにエネルギーの諸センター——を探究のチャンネルとして組み入れたことを、どれほど肯定的に受けとめたか、報告している。一つの主題を熟考したり、知識を得るうえでさまざまなセンターに意識的な注意を向けるという方法は、大半の参加者にとって新しいもので、また全員にとって深遠な経験であった。多くの参加者は、彼らがこれまで慣れ親しんできた認知中心のアプローチよりも、よりホリスティックで、より健全な探究方法を（再）発見したことに喜びと感謝の念をいだいたと述べている。参加者の一人は、探究のプラクティスをおこなっているうちに、彼女の心身のなかにある「真に深遠で、直線的な知とはかけ離れた場所」にふれたと述べている。彼女の今後の研究活動においても、そうした面を取り入れ、それが「あらわれてくる」ことを願うと述べていた。この意見には多くの参加者が賛同した。

2. 自他境界の調節

大半の参加者にとって、個人の境界や、対人間の境界というテーマは、くり返しあらわれてくる問いであった。IEMの最中には、境界は流動的で変化

する。そのため、他者との分離という点からみれば、探究者は、それまでとは異なる経験的現実へと導かれるのである。通常の意識状態における境界感覚は区別と分離からなるが、これがプラクティスのなかでたえず体験的に挑まれることになる。通常、境界の感覚は、一体性や非二元性といった抽象的な、スピリチュアルな観念に固執するなかで概念的に克服されるか、あるいは性的結合のなかで体験的に克服されるか、そのいずれかであるのだが、IEMのプラクティスのなかでは何度となく乗り越えられた。それゆえ多くの参加者たちは、彼らの慣れ親しんできた経験的パラダイムの妥当性、必要性、役割について悩まされることになった。それは境界というものを、日常の人間関係のなかで、また瞑想をしているときに、どのように、どれくらい、そしていかなる目的のために作りだし、保持していくべきか、という疑問であった。数人の参加者は、彼らがいかに新しい気づきを得たか、また他者との境界の感覚がどのように変化したのかについて報告している。さらにまた、その後の日常生活のなかで、より自由に意図的に境界を調節していく仕方について、とても大きな実際的な知見を得たことをどのように感じているか報告する者もいた。

IEMの最中に生じる創造力と活力の高まりに加え、参加者は、境界を調整する力を得て、それが他者との関係に影響を与えることを予想できると報告している。たとえば、ある女性は瞑想中の経験を「解放と収縮のダンス」と表現しているが、これは、彼女が習慣的に経験している固定された境界と収縮の状態とは、明らかなコントラストを示している。彼女にとって習慣的な経験は「差異と分離という幻想を築きあげ」、「身体をとおして生が完全にあらわれ、展開してゆく」ことを妨げていたと語っている。別の参加者は、境界が分離し区別するために存在しているのか、それとも自己を強くしっかりと保つために存在しているのかという点について探究をおこない、それら両極が矛盾や緊張を抱えることなく同時に真に成り立っているということを発見した。このような洞察は、ほかの参加者からのフィードバックのなかにも見られる。多くのふりかえりのなかで指摘されていることであるが、境界は通常、安心や恐れといった問題に関係しており、重要な機能を果たしている

のだが、日常の人間関係のなかであまり注意を払われることなく固定したままで維持されるときには、生き生きとした活力や、つながりや、親密さのレベルの向上を妨げてしまう。多くの参加者が、境界に気づき、それを伝えるなかで、新しい開放感と柔軟性を見いだしたと報告している。ある女性は「私と私でないもの」のあいだのダイナミックな経験が、さまざまなレベルにあらわれていると述べている。彼女は他者の状態に容易に同調しやすい繊細で直観的な人間であり、自分のエネルギーのパターンについて新たな「知のベースライン」を見いだしたという。この知のベースラインをもつことで、どの感情やエネルギーが彼女自身のものであり、どれが他者のものであるのか、彼女はよりよく見分けることができるようになった。

3. コミュニオンへの熱望 対 のみ込まれる恐れ

境界の議論に関連して、参加者の多くは、一見正反対に思えるような二つの力のあいだで苦しんだことをふりかえっている。一方の力は合一の方向へとむかい、もう一方は個別化する方向へとむかう。探究プロセスをとおして、他者との深いつながりと合一を経験したいという思いと、その一方で、個のアイデンティティを守りたいという思いがあり、こうした両極性は、参加者に共通するジレンマとして浮かびあがってきた。参加者たちはふりかえりのなかで、他者から（明らかに）究極的に分離され、孤立していると感じたときの深い嘆きや悲しみだけでなく、他者との深い身体的、エネルギー的、感情的なつながりを探究するときに感じられた「融解」や「自己喪失」の恐怖についても、くり返し述べている。何人かの参加者は、この両極性（そのなかに生まれた緊張）に対する彼らの関係は、探究プロセスのなかで変化していったと報告している。ある女性は、彼女の経験した深い嘆きと孤独は「個人の意識の進化に分かちがたく結びついて」おり、「それが現実として認められる必要がある」とわかったと述べている。そして同時に、こうした深い嘆きが、他者とのあいだでつながりをもちたいという動機にもなり、根本ともなるのだと結論している。また別の参加者は、この問いにかかわる探究のなかで、ますます流動的になってゆく経験をしたと報告している。これらの

人たちは、彼らの意識の深層に入っていくなかで、同時にプラクティスのパートナーとより深いつながりを持ち、そこには孤立の恐怖からも、のみ込まれる恐怖からも自己収縮が生じることはなかったと述べている。

4. 探究の諸センターにある知恵の珠

探究のプロセスをとおして、身体は、知の容器、発生器、そして受容器として活用され、そのように経験された。IEMの身体接触をとおして、参加者たちは彼ら自身のエネルギーのセンターを知り、それらへとつながり、認知的な道をとおしてのみ到達可能だと思っていたことを超える洞察にふれることができた。探究のなかで焦点をあてられるチャンネルは、もちろんそれぞれが独立して機能しているわけではないものの、さまざまなレベルで、参加者に独特の経験と理解をもたらした。本節では実践的で変容的な成果をとりあげているが、それらは、これらのセンターの性質についてのより深い理解を示し、それらが関係的スピリチュアリティのなかで果たしている役割を明らかにしている。

身体（ボディ）、ある参加者の言葉を借りれば「根っこのセンター」（root center）は、しばしば自己の深部や大地にグラウンディングし、つながるところとして語られ、経験されてきた。また、身体／根っこのセンターは、人びとのあいだで「生命の固有のリズム」や「すべての動きの根底にある脈動」へとつながる部分として語られてきた。多くの参加者は、身体を外部の世界や自分自身とのグラウンディングの源として使うことについて、自覚が高まり、能力が増したと報告している。

身体／根っこのセンターが基本的な保持と接続のための機構として見られているのに対し、生命センターは、人間のすべての属性に命を吹き込み、それを活性化するようなエネルギーの発生器として経験される。それは「強く」「熱い」「蛇」のエネルギー源として描かれ、他のすべてのセンターにエネルギーを供給するとともに、「深いつながりの源」でもある。生命センターが「境界を開き、身体から、身体をとおして知恵があらわれるようにする」ことを見いだした参加者たちもいる。つぎのドローイング（図4）には、原始的な

生命エネルギーが解き放たれ、上昇し、ボディ・ハート・マインドの複合体に活力を与え、育んでいる様子が描かれている。

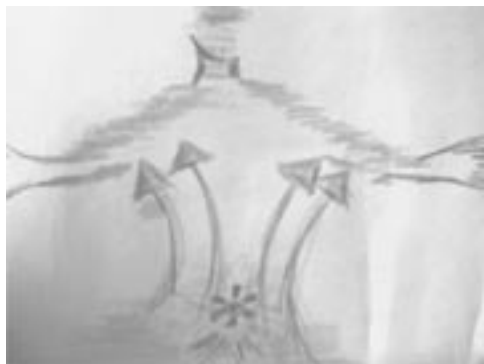


図4（エリザベス・フッサール）

探究に参加している人たちは、その「火」が膨張し、つながりに向かうときには、生命エネルギーは「いくぶん荒々しい」と感じられ、しばしば性的あるいはエロティックな質へと歪められたり、限定されたりすることを見いだした。しかし、生命センターが（性的）魅力やエロティシズムやセクシュアリティといったものに限定されることなく、彼ら自身や彼らの関係性を養い育てる純粋な生命力として経験されたときには、このエネルギーに対する新たな気づきと関係の仕方が明らかになってくることを、多くの参加者が報告している。つぎの詩は、生命センターに入りこんでいるときに参加者が知った「野生のエネルギー」を表現している。

生命力よ。

爆発する万華鏡

存在への炸裂

蜜と肉の源泉からあらわれる。

激しく想像がめぐり、

感覚のままさまよい、

荒々しさへと解き放たれる。

どこにも収まらず、何にも支配されない。

光をまき散らし

無造作に落ちてゆき、

表出を求めながら。

小さなささやきに耳を止めて。

誰かを殺してしまうかもしれない

この力で。

解き放たれた、野生の

祝祭。

誰がパーティをしたって。

私よ！私よ！

だけどそこまで

それまで。

社会は私にとっても上手に教えこむ。

私は「よい子」だって。

いまのところ。

(キム・ベラ)

ハートのセンターは、関係的スピリチュアリティにおいて、接合器官、共鳴器、そして共感的受容器として認められた。それはほとんどの人にとって、そこをつうじて、彼ら自身の、パートナーたちの、時にはグループ内の、あるいはそれを越えた集合的なものの「神聖な部分」へとつながることのできるチャンネルであった。驚くにはあたらないが、参加者はハートのセンターを「愛の源」として、ケアや癒しの源として語った。そこは、自分自身や他者にはっきりと完全にふれ、抱きとることができる場所なのである。多くの人は、ハートとつながること、あるいはハートをとおして何かとつながることを、「感動的な癒し」の経験だと述べている。ハートをとおして深く結びついてゆく癒しの経験は、つぎの詩にも描かれている。

頭は
安らいでいる
ハートのなかで。
息が
息へと入っていく。
ハートの鼓動は
混じりあう。
二つのハートが
ひとつになる。
それは全体性。
あるいは二つの断片
ひとつの境界のない世界。
ひとつでは
つくりだせない
全体を。
ハートは開く
泉から
湧きだす
池のように。
ハートは入り、
浸り、
はためいて、
逃れようとする。
これを知らないハートもある
ハートが愛のなかで
泳げるということ。

(ニッコロ・フランセスコ・サンティエユ)

ハートはまた、光と闇、幸福と悲しみ、動物と神のような多様なパラドッ

クスを受け容れることのできる統合のセンターのようにも見られた。つぎのドローイング（図5）は、すべてのものを包み込むこのハートの力を描きだしている。



図5（エリザベス・フッサール）

生命エネルギーの影（シャドー）が無制限な、力強い、潜在的な破壊性として理解されるのに対して、ハートの影は、傷つきやすさと悲しみの経験である。傷つきやすさは、「あいだ」のなかで起こる開放された親密な出会いのさいに傷つけられることと、しばしば結びついていた。悲しみは、さまざまなテーマと結びついて経験された。参加者の多くは、ハートを、じっと耐えるセンターであると同時に、悲哀と悲しみをかかえ込むセンターであると述べている。したがって、ハートが抱きとられるとき、幾人かの参加者は悲しみの感情にふれたが、その感情がどこからきたのかわからないままであった。幾人かは、このような悲しみは、日常生活のなかで、ハートのレベルの合一や、つながりや、コミュニティが欠けていることに対する嘆きから生じたのではないかと考えた。

マインドは、スピリチュアルな発達のなかでは、妨げとなる力としてとらえられることがあるが、探究プロセスのIEMのなかでは、マインドは改めて新しい角度から見られるようになった。参加者たちは、彼らがマインドに対して感じた感謝や尊敬の念を表明した。マインドは、多くの霊的な修行道のなかで、しばしば霊的な悟りに対する障害とみなされたり、敵とみなされる

ことすらあった。しかし、マインドを意図的に探究プロセスのなかに取り入れることによって（たとえば、マインドに焦点をあてたIEMのなかで）、「マインドの働き」の質が変化したと報告している参加者もある。多くの参加者は、マインドが他のセンターと有機的に結びつくことを経験した。そのときマインドは、身体に支えられ、身体に根を下ろし、本能によって生命力を与えられ、ハートによって柔軟になった。すべてを取り仕切るという普段の役割から解放されると、マインドはリラックスでき、本来の明敏さと美しさがあらわれてくる。数人のメンバーは、マインドがリラックスし、他のセンターと協同して統合的な探究プロセスに参加することを経験したと報告しているが、これは通常の意識のなかで支配的で、しばしば強調されるマインドの性質とは対照的なものである。ある女性はこのように書いている。「マインドは、意識が自由に未知の領域のなかで飛び込むのを許し、いまだ形になっていない、ありとあらゆる可能性のなかで飛び込むのを許すのです。私の存在は、もはやマインドに捕らわれた囚人ではなく、大いなる神秘に開かれ、果てしない地平線へと目を走らせることができるのです」。また別の参加者は、彼女が（思考と感情の連鎖という通常の意味での）「マインドの不在」を経験したとき、「何か別のものが存在していました。何か、神秘的で本質的なものです。私は自分が存在と活動の器のような感じがし、はっきりとした感情がなく、確かな身体もないように感じたのです」。こうした発言は、観想的なプラクティスのなかでは珍しくもない経験について述べているのだが、それでもやはり、探究のトピックを探索するためにマインドを慎重に取り込んでいく瞑想のなかで、こうした経験が生じた以上、ふれておく価値がある。つぎの詩（マインドに焦点をあてたIEM後に書かれた）は、このセンターに関連して多くの参加者にあらわれた光と広大な意識を、美しく表現している。

空のように青く
星のように明るく
雲のように軽く

満月のように神秘的

かぐわしく私は夜空を飛んでいる

(ローレット・デュブイス)

結 論

このコースでは、「関係的スピリチュアリティの本質は何か」という問いに対して、参与的で協同的なアプローチを適用したことによって、驚くほど豊かな意味の層が姿をあらわした。これは、マインド中心のアプローチやブリコラージュ的アプローチでは決して到達できなかったものであろう。統合的な探究を用いることによって、つまり、人間のより多くの次元の複雑さと認識力に分け入り、多様な知のあり方を開くこの探究を用いることによって、参加者たちは、探究のトピックに関して、より深く統合された理解を得ることができたと報告している。

探究の成果だけでなくプロセスに注目すれば、数多くの重要な影響が協同研究者たちにあらわれていることに気がつく。それらを要約すれば、まず第一に、この探究の参加者たちは、程度の差こそあれ、スピリチュアルな状態の直接体験をもった。その体験は、多くの観想的伝統によって記述されてきた状態と現象学的に近似している。このこと自体、むしろ非常に注目すべき現象である。なぜなら、多くの伝統は、たいいていそのような状態へ到達するには何年もの瞑想や観想修行が必要とされると強調しているからである。したがって、IEMのプラクティスは、二人あるいはそれ以上の人の多次元的なエネルギーのあいだに生まれる何らかのシナジー的な共鳴をとおして、そのような状態を導くのではないかと推測される。

参加者は、非日常的な「あいだ」の、三つの異なる質（一体性、コミュニケーション、非二元性）を探究したのだが、ここから彼らはスピリチュアルなテーマや心理的なテーマをふりかえることができた。この状態に身を置くなかで、個人の問題や、対人間の問題に取り組むことによって新たな洞察や、創造的表現、実践的な知恵、そして変容的な変化が見いだされた。それらは多くの

場合、それまでの理解や能力を超えたものであった。IEMをおこない、それについてふりかえりをするなかで、探究者は、現在の教育のなかで馴染みのものとなっているマインド中心のパラダイムを超えた知の多層性を認識し、それに直接ふれ、それを利用することを学んだのである。

参加者によって導きだされ、本論文のなかで考察された諸結論は、文脈に依存したものであり、この探究に特有のものであることを、私たちは自覚している。これらの成果のもっと広く一般的な妥当性を調べるには、さらに探究のプロジェクトを組み、このプロセスをくり返しおこなうことが求められるであろう。そのさい同様の探究ツールを用いたり、異なるツールを用いたりすることが必要であろう。参加者の経験、それに結びついた多様な洞察、そして変化は、このプロセスのなかでは健全で、意味深いものであったが、おそらく今後の探究においても、さらに妥当性を得られるであろう³⁾。

本研究の結果が文脈依存的なものであることを認めたくえで、この探究プロセスのなかで真実と思われたいくつかの重要事項、および探究のなかで経験された非日常的状态について、以下に要約しておきたい。

●関係的スピリチュアリティの探究のなかでふれられた多くのテーマは、逆説的な性質を帯びたものである。両極的なものがともに存在したり、同時に感じられたりする。すなわち、両極的なものとは、私と私でないもの、信頼と恐れ、堅固な身体への気づきと無境界の意識、合一と分離、親密さと孤立、包まれている感覚と広がり感覚、喜びと悲しみなどである。

●これらの両極へ直接ふれる経験や、両極のあいだを行き来する運動は、プラクティスをとおして流動性を増していった。両極のあいだで通常感じられる緊張は、「あいだ」に特有な質を経験するなかでしばしば軽減され、調和を見いだしていった。

●個人のアイデンティティは孤立したものであるという広く文化的に浸

3) 協同的探究の妥当性に関する周到な議論は、ヘロン (Heron, 1996) およびヘロン & リアソン (Heron & Reason, 近刊) に見られる。

透した見方や、人びとのあいだの認知上で構築された分離は、体験をと
おして徹底的に検討され、取り払われていった。体験のレンズをととし
て見ることによって、合一や融合の状態から、差異、境界、分離の明確
な知覚にいたるまで、気づきに幅があることが明らかになった。両方の
気づきとも、体験をつうじてリアルなものとして認められた。

●非二元性、コミュニオン、そして一体性が、身体をともなう接触のな
かであらわれてくる。これが起こるのは、私たちが安全と信頼にみちた
空間をつくりだし、「あいだ」に対して真に開かれているときである。

●意識的あるいは無意識的な恐れは、関係的スピリチュアリティの経験
のなかで、管理し、制限し、防御する要因としてはたらく。

●開かれて浸透性のある状態や、堅固な境界や分離の状態は、ともに可
能性としてあり、選択と意図とプラクティスによって変わってくる。

●こうしたワークにおいては、身体接触が個人的な観想および関係的な
観想のなかで主要なファクターとなる。ふれることをとおして、個人の
内的経験は、意識の複数の層で広げられ深められる。同時に、接触は実
践者たちのあいだにダイナミックで流動的な、共有の場をつくりだし、
エネルギー的、感情的、身体的、精神的な交流が起こる。

●現代の西洋社会の人間関係に特徴的な不安は、この種のグループ・プ
ロセスのなかで、しだいに減少する。同様に、対人関係のなかでの支配
や防御や強固な境界への必要も弱められる。

●そこに生じる知の質には、おそらく「身体化された知」(embodied
knowing)の達成があらわれている。シェアリングのとき、人びとの声
は、自分自身の体験に裏付けられ、リラックスし、体験に根ざしたもの
になっている。これはアカデミックな議論に典型的にみられる感情の調
子とは、大きく異なるものとして経験された。

●最後に、クラスが発展してゆくにつれ、参加者たちはIEMプラクティ
スを共に創造していくことに、いっそう責任をもつようになった。これ
はグループの重要な「成熟プロセス」として感じられた。しかし、こう
したプロセスは伝統的な学問環境のもとでは減多に起こらない。

協同的な研究モデルという文脈のなかで、探究のプロセスに人間のすべての次元を参与させることは、学問的な学習にとって新しいユニークなアプローチをもたらした。フェレルにとって、そもそもこのコースは、探究の方法を拡大し、人間のすべての次元のもつ認識力をそこにふくめていくことによって、スピリチュアルな議論のなかで長年問題になっていることに新たな光を投げかけるものとして想定された。そこでは、より統合的で、包括的で、ホリスティックな研究スタイルが奨励された。つまり、それは人間存在のすべての主要な次元（身体的、生命的、感情的、心理的、霊的次元）をかかわらせるものであった。そうすることによって、このようなコースは、より変容的な教育モデルの具体化や正当化に貢献できるだけでなく、よりホリスティックな知の様式の開拓にも貢献できる。そして、そのような知は、人間の経験と現実について、より完全な、それゆえ歪曲されていない姿を明らかにしていくであろう。探究のプロセスに人間のすべての属性を意図的に統合していくなかこそ、学問的世界のなかで変容的な教育の成果と範囲を拡張してゆける、計りしれない可能性がひそんでいると思われる。

文献

- Buber, M. (1970). *I and thou* (W. Kaufmann, Trans.). New York: Charles Scribner's Sons.
- Ferrer, J. N. (2002). *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. Albany, NY: SUNY Press.
- Ferrer, J. N. (2003). Integral transformative practices: A participatory perspective. *Journal of Transpersonal Psychology*, 35 (1), 21-42.
- Ferrer, J. N. (2005). *Course syllabus: "Embodied spiritual inquiry."* San Francisco: California Institute of Integral Studies.
- Ferrer, J. N. (2006, May/June). Embodied spirituality: Now and then. *Tikkun: Culture, Spirituality, Politics*, 41-45, 53-64.
- Ferrer, J., Albareda, R., & Romero, M. (2004). Embodied participation in the mystery: Implications for the individual, interpersonal relationships and society. *ReVision*, 27 (1), 10-17.
- Ferrer, J., Romero, M., & Albareda, R. (2005). Integral transformative education: A participatory proposal. *Journal of Transformative Education*, 3, 306-330

- Heron, J. (1996). *Co-operative inquiry: Research into the human condition*. London: Sage.
- Heron, J. (1998). *Sacred science: Person-centered inquiry into the spiritual and the subtle*. Ross-on-Wye, UK: PCCS Books.
- Heron, J. (2006). *Participatory spirituality: A farewell to authoritarian religion*. Morrisville, NC: Lulu Press.
- Heron, J., & Lahood, G. (forthcoming). Charismatic in inquiry in concert: Action research in the realm of the between. In P. Reason & H. Bradbury (Eds.), *Handbook of action research: Participative inquiry and practice* (2nd ed.). London: Sage.
- Heron, J., & Reason, P. (1997). A participatory inquiry paradigm. *Qualitative Inquiry*, 3, 274-294.
- Heron, J., & Reason, P. (2001). The practice of co-operative inquiry: Research with rather than on people. In P. Reason & H. Bradbury (Eds.), *Handbook of action research: Participative inquiry and practice* (pp. 179-188). London: Sage.
- Heron, J., & Reason, P. (forthcoming). Extending epistemology within a co-operative inquiry. In P. Reason & H. Bradbury (Eds.), *Handbook of action research: Participative inquiry and practice* (2nd ed.). London: Sage.
- McWhinney, W. (2005). Foreword. *Journal of Transformative Education*, 3 (4).
- Romero, M., & Albareda, R. (2001). Born on earth: Sexuality, spirituality and human evolution. *ReVision*, 24 (2), 5-14.

原著

- Osterhold, H. M., Husserl R. E., & Nicol, D. (2007). Rekindling the fire of transformative education: A participatory case study. *Journal of Transformative Education*, 5 (3), 221-245.